

# 人物肖像画の頭上空間の大きさに関する研究 —帽子による影響についての考察—

松本 昭彦

美術教育講座

## Study on Size of Overhead Space of Portrait Painting: Consideration on Effects of Hats

Akihiko MATSUMOTO

Department of Fine Arts Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

### 1. はじめに

#### 1.1 研究の背景

筆者はこれまでに西洋及び日本の明治期以降の油彩で描かれた単身人物肖像画の画像を収集し、頭像、胸像、半身像、七分身像、全身像の5つのカテゴリー毎に、頭上空間の大きさ、目の位置、頭部や胴体の縦軸位置、足下空間の大きさを測定調査することで、肖像画の標準的な構図法について研究をしてきた。その理由は、構図によって作品の出来栄は大きく左右されるからである。

ところで、石膏デッサンの作例が掲載された書籍等を見てみると、頭部の上側が一部切り取られて、石膏像全体の大きさを強調する構図で描かれていたりする。また、雑誌に載っている人物写真においても、モデルの目鼻立ちや唇を強調するために、頭の一部を切り取ったクローズアップ構図がよく用いられている。こうした影響であろうか、大学生たちに人物を自由に描かせるみると、頭上に余白のない絵になっていた。頭部を切り取る理由を尋ねると、「迫力を出したかった」と答える者が大半である。モデルの人物自体に迫力があれば納得もいくが、優しい表情のモデルの場合には矛盾しないだろうか。

人物肖像画は、モデルに似せて描かなければならないという宿命がある。また、その人の性格や地位、暮らしぶりを彷彿とさせるような衣装や装身具、背景なども絵の重要な見せ所であるため、作者にとっては工夫を要するところである。昨年、李氏朝鮮時代の肖像画の構図法について調査をしたところ、西洋及び明治期以降のわが国の肖像画（以下、西洋流の肖像画と略す）とは異なる構図的特徴を見出すことができた。その原因は装身具の一つである官帽によるものと考え

られた。モデル人物の身分を表す帽子があることで、帽子を被っていないモデルを描いた西洋流の肖像画と比べ、頭上空間が狭かったり目の位置が低かったりしていることなども分かってきた。

#### 1.2 これまでに得られている知見

西洋流の人物肖像画においては、頭部や身体の縦軸は画面を左右に概ね半々に分割する位置にあることが分かっている。また、標準的な頭上空間の大きさは、頭像で画面縦寸の10%、胸像なら10%弱、半身像になると5%程度であり、作品画面に描き入れる人体の下側範囲が増えるにつれて頭上空間が減少していく。しかし、七分身像では12%以上、全身像になると20%弱の空間を設けており、半身像以上のカテゴリーでは増加に転じている。

もう少し述べると、頭像と胸像では頭上に空間のない、頭の上側を切り取った肖像画もあり、作品によって頭上空間の大きさにはばらつきが見られる。ばらつきの原因は、画中で何を強調すべきか、人物をどこで切れば（トリミングすれば）収まりが良いか、どれだけ頭上をあければ美しいかなどを、作者が判断した結果だと考えられる。また、興味深いのは、半身像、七分身像、全身像には頭部を切り取った構図作品が（筆者の調査した範囲では）一点もなかったという点である。西洋流の油彩肖像画における頭像、胸像、半身像、七分身像、全身像毎の、頭部と胴体の軸の位置、目の位置、頭上空間などの調査結果については、拙稿『肖像画の構図に関する研究』<sup>1)</sup>を一読いただきたい。

李氏朝鮮時代の人物肖像画でも、頭軸や胴体軸は頭像、胸像、半身像、七分身像、全身像、いずれのカテゴリーにおいても、画面を概ね左右半々に分けている。李氏朝鮮時代の頭像作品は数多く見つからなかった

が、その頭上空間の大きさは画面縦寸の6～9%で、頭上空間がない作品もあった。胸像100作品における頭上空間の大きさは平均で縦寸の7%、より中央的な値を求めた10%トリム平均では15%であった。22点の半身像の頭上空間は標準で縦寸の約13%、作品数の少なかった七分身像の場合で縦寸の15～17%が設けられていた。

全身像においては、西洋流の肖像作品を調査したときとは異なり、全身立像（立ち姿の全身像）、全身椅子座像（椅子に座った全身像）、全身床座像（床に座った全身像）、高僧全身椅子座像（高名な僧侶が椅子に座った全身像）、高僧全身床座像（高名な僧侶が床に座った全身像）に分けて調査した。紙幅の都合上、高僧像に関する調査結果については割愛するが、全身立像の頭上空間の大きさは標準で画面縦寸の2～3%、全身椅子座像で3～4%、全身床座像の場合4%程度であった。詳細は拙稿『朝鮮肖像画の構図に関する研究』<sup>2)</sup>を参照していただきたい。

西洋流の肖像作品と比べて、李氏朝鮮時代の全身像における頭上空間が小さいのは、帽子の存在以外に、絵を飾る空間の広さや天井高にも起因していると推察されるが、地位の高い国王の肖像画（御真）を飾った慶基殿では西洋流の肖像画以上に大きな頭上空間が設けられた全身像作品を見ることができる。

西洋流の油彩肖像画と、李氏朝鮮時代の肖像画における画面の縦寸に占める頭上空間の大きさ（百分率）を下表1にまとめた。

### 1.3 研究の目的

帽子の高さが人物肖像画の構図に及ぼす影響については、さらに具体的な調査をする必要があると考えられる。そこで、帽子を被っていないモデルと、高さが異なる各種の帽子を被ったモデルの全身をスケッチし、帽子がないときは西洋流、帽子がある場合には李氏朝鮮時代の肖像画における標準的な頭上空間を設けて、頭像、胸像、半身像、七分身像、全身立像、全身

椅子座像の6つのカテゴリー別にトリミングした後、必要と判断される補正をすることで、構図に及ぼす帽子の影響について考察することを研究の目的とした。

## 2. 研究の方法

### 2.1 研究方法の概要

高さの異なる9種類の帽子を用意し、実際の人物モデルに、それぞれの帽子を被らせたときと、帽子がないときの全身の立ち姿をカメラで撮影する。また、椅子に座らせた状態でも、それぞれの帽子があるときと、ないときの全身を撮影する。写真をもとに全身立像と全身椅子座像のスケッチを制作し、描いたスケッチを頭像、胸像、半身像、七分身像、全身立像、全身椅子座像の6つのカテゴリー毎にトリミングを行う。

トリミングの際、帽子のない場合には、一旦、西洋流の肖像画における標準的な頭上空間を設け、帽子のあるものについては、李氏朝鮮時代の肖像画における標準的な頭上空間を一旦、設けておく。その後、不自然さや窮屈さ等があれば、頭上空間の大きさを補正する。補正前後での頭上空間の大きさの変化は、帽子による構図への影響であると捉えることができる。

### 2.2 研究で用いる帽子

高さの低い帽子を被った人物肖像画における頭上空間の大きさは、帽子のない肖像画と比較しても、差はほとんどないと予測される。そこで、高さの低い帽子としてシャワーキャップ、ボンボンのない毛糸の帽子、カンカン帽（頂が平らな西洋発祥の麦わら帽子）の3種類を用意する。また、中程度の高さのある帽子として、ハロウィン用ヘアアクセサリーとしての小さな帽子、ポーラーハット（チャップリン帽子）、円錐型の小さなパーティハットの3種類を用意する。さらに頭上空間の大きさに強く影響すると予測される高さの大きい帽子として、上部に膨らみのあるコック帽、シェフハット（ロングコック帽子）、つばの広い円錐型の魔女帽子の3種類を用意する。

### 2.3 研究の手順

前節で述べた高さがあまりない低い帽子3種類、中ぐらゐの高さがある帽子3種類、大きめの高さがある帽子3種類、計9種類の帽子を用意しておく。実際に人物モデルを立たせて、無帽状態のモデルの全身をカメラで撮影する。続いて、同一のポーズのまま、9種類の帽子をそれぞれ被らせて撮影を行う。

次に、モデルを椅子に座らせ、無帽の状態で全身を写真撮影する。その後、同一の座りポーズのまま、9種類の帽子をそれぞれ被らせて撮影を行う。

撮影した写真の画像データをiPadに取り込み、画像編集ソフトProcreate、及びApple Pencilを用いて、

表1 西洋流と李氏朝鮮時代の肖像画の標準的な頭上空間

区分	西洋流の肖像画	李氏朝鮮時代の肖像画（高僧像除く）
頭像	10%	6～9%
胸像	10%弱	7%（10%トリム平均値では15%）
半身像	5%以上	13%
七分身像	12%以上	15～17%
全身像	20%弱	全身立像では2～3%
		全身椅子座像では3～4%
		全身床座像では4%

写真上にレイヤーを施し、アウトラインをなぞり描きする。その後、立体感を表すために、自然な明暗も描き加える。この方法で全身の立ちポーズと座りポーズの両方について、無帽時各1点、小計2点、高さの異なる帽子着用時各9点、小計18点、総計20点のデジタルスケッチを描く。

頭像は、モデルの鎖骨付近より上側で全身スケッチを切り取ることにする。帽子のない場合は、西洋流の頭像における標準的な頭上空間の大きさである画面縦寸の10%の空間を設けてトリミングする。また、帽子のある場合には、李氏朝鮮時代の肖像画における頭像の標準的な頭上空間の大きさである画面縦寸6～9%のうち、小さい方の6%の空間を設けるように、一旦トリミングする。その後、必要と判断されるトリミング補正を行う。

胸像は、胸骨の下部辺りより上側で全身スケッチから切り取る。帽子のない場合には、西洋流の胸像における標準的な頭上空間の大きさが画面縦寸の10%弱なので、一旦9%の頭上空間を設けることにする。また、帽子のある場合には、李氏朝鮮時代の肖像画における胸像の頭上空間の平均値である画面縦寸の7%、及び10%トリム平均値である15%のうち、小さい方の7%の頭上空間を設けるように一旦トリミングする。その後、必要と考えられる補正を行う。

半身像は、全身を描いたスケッチ画像から、股関節付近より上側で切り取ることにする。帽子のない場合には、西洋流の半身像の標準的な頭上空間の大きさが画面縦寸の5%以上なので、一旦5%の空間を頭上に設けておく。また、帽子のある場合には、李氏朝鮮肖像画の半身像における頭上空間の標準的な値である画面縦寸の13%の頭上空間を設けるようにトリミングしてみる。その後、必要と考えられるトリミング補正を行う。

七分身像では、膝関節付近より上側で全身スケッチを切り取ることにする。帽子のない場合には、西洋流の七分身像における標準的な頭上空間の大きさが画面縦寸の12%以上あるので、一旦12%の頭上空間を設けることにする。また、帽子のある場合には、李氏朝鮮時代の肖像画の七分身像における頭上空間が画面縦寸の15～17%なので、小さい方の15%の頭上空間を設けるように一旦トリミングする。その後、必要と考えられる補正を行う。

帽子のない全身像は、西洋流の全身像における標準的な頭上空間の大きさが画面縦寸の20%弱なので、立像、椅子座像ともに、一旦20%の頭上空間を設けるとともに、足下にも10%<sup>3)</sup>の空間を設けるようにトリミングする。また、帽子のある全身立像には、李氏朝鮮肖像画の全身立像における標準的な頭上空間である画面縦寸の2～3%のうち、小さい方の2%の頭上空間及び、足下にも2%<sup>4)</sup>の空間を設けることにする。

帽子のある全身椅子座像には、李氏朝鮮時代の全身椅子座像における頭上空間の標準値である画面縦寸の3～4%のうち、小さい方の3%の頭上空間と、足下に8%<sup>5)</sup>の空間を設けるようにトリミングする。その後、必要と判断される補正を行う。

頭像、胸像、半身像、七分身像、全身立像、全身椅子座像の6つのカテゴリ毎に、補正した内容に基づいて、帽子の高さが及ぼす人物肖像画の構図への影響について考察を試みる。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 頭像の頭上空間に与える帽子の影響

帽子のない頭像(次頁図1)は全身スケッチを鎖骨付近より上側で全身スケッチを切り取って、西洋流の頭像における標準的な頭上空間の大きさである画面縦寸の10%の空間を頭上に設けたものである。また、帽子のある頭像スケッチ(次頁図2～10)には、画面縦寸の6%の空間を頭上に設けた。

図1の帽子がないときの頭像においては、画面が窮屈に感じられることもなく、広すぎて間延びしたようにも見られないため、頭上空間の大きさの補正は特に必要がないと判断される。

図2, 3, 4のように、帽子がないときの頭頂部と比べて、さほど頂の高さが変わらない低い帽子を被った場合には、6%の頭上空間では画面がやや窮屈に感じられる。試しに、両目の高さが概ね、画面縦寸を二等分するようにトリミング補正をしてみると、結果的に頭上空間は10%をやや超えることになったが、それでも絵に不自然さは感じられなかった。このことから、高さの低い帽子を被った頭像画においては、カントの言う「自然美」<sup>6)</sup>の観点から判断すると、頭上空間を10%以上設けても良いと考えられる。

図5のハロウィン用ヘアアクセサリーは、帽子本体は小ぶりであるが、頭頂に載せるように付けるため、中程度の高さの帽子としてではなく、高さの大きい帽子に加えるべきであったと反省している。同じことがパーティハット(図7)にも言える。このことから、帽子の本体が小さくても、載せるタイプの帽子を被った頭像を描くときには、高さの大きい帽子を被った場合における頭上空間を意識すべきだと考えられる。そのため、図5と図7については、高さの大きい帽子と併せて後述する。

逆に、図6のボーラーハットは、本体には中程度の高さがあるものの、実際にモデルに被らせてみると、帽子の頂部の高さは、帽子のないときの頭頂の高さと大差はなかった。このことから、帽子そのものの高さが頭上空間に影響を与えるのではなく、無帽子のときの頭頂部から、被ったり載せたりしたときの帽子の頂までの高さがどれだけ増加するかが構図に影響を与え



図1 帽子のないとき 図2 シャワーキャップ 図3 毛糸の帽子 図4 カンカン帽 図5 ハロウィン帽子  
 (※ 図の見方：図1は画面縦寸の10%，図2～10には6%の頭上空間を設定)



図6 ボーラーハット 図7 パーティハット 図8 コック帽 図9 シェフハット 図10 魔女帽子

ると言うことができよう。図6を，図2，3，4のときと同様に，両目の高さが画面縦寸の半分になるようにトリミング補正をしてみると，概ね10%の頭上空間が生まれたが，不自然さはなかった。

高さのある帽子（図8，9，10），及び前述の理由で高さのある帽子に加えるべきと判断された帽子（図5，7）の場合には，6%の頭上空間のままでも不自然さは感じられない。頭上空間を減らすにしても，画面上端で帽子が切れたり接したりしないよう，半分の3%程度までに留めておきたい。

### 3.2 胸像の頭上空間に与える帽子の影響

前節における頭像の頭上空間を調べた結果と，それに対する考察を踏まえ，9つの帽子を高さ別に3つのタイプに分けるのではなく，被ったときの帽子の頂部の高さが無帽子のときの頭頂部と比較して差が小さいもの（以後，低い帽子と略す）と，差が大きいもの（以後，高い帽子と略す）の2つに分けて考察を試みることにする。

まず，帽子のない胸像（次頁上段図11）に設けた9%の頭上空間には目立った不自然さは感じられないが，

もう少し空間を大きくすると，ゆったりとした構図になるだろう。

低い帽子を被った胸像では，当初設定の7%では頭上がいづらか窮屈に感じられる（図12左）。試しに頭上空間が10%になるように補正してみると，窮屈さはなくなった（図12右）。さらに，試しに朝鮮肖像画の胸像における頭上空間の10%トリミング平均値が15%であるため，15%の空間を設けるようにトリミング補正してみると，さらにゆったりして見え，不自然さも全くなかった。紙幅の都合でカンカン帽以外の低い帽子を被ったときの図を挙げなかったが，カンカン帽のときと結果は同じであり，10～15%の頭上空間に補正したときの方が「自然美」を感じることができる。

また，高い帽子を被った胸像（図13）を見てみると，朝鮮肖像画の胸像における平均値である7%の頭上空間のままで特に不自然さは感じられない。同様に，頭と帽子の頂差が大きいコック帽，シェフハット，パーティハットやハロウィン帽子を被った胸像においても7%の頭上空間のままで良く，特にトリミング補正の必要はないと考えられる。



図11 帽子のない胸像 (9%)

図12 低い帽子を被った胸像 (左:7%, 右:10%)

図13 高い帽子を被った胸像 (7%)

(※ 図11～16の見方: ( ) 内は画面縦寸に占める頭上空間)

### 3.3 半身像の頭上空間に与える帽子の影響

帽子のない半身像に設けた5%の頭上空間では絵が幾分窮屈に感じられる(次頁図14左)。頭上空間を10%にトリミング補正を試みたところ、自然でゆったりとした画面が得られている(図14右)。

低い帽子を被った半身像には、当初設定の通り13%の頭上空間が与えられている(図15左)。この状態で全く不自然さはなく、画品すら感じることができる。試しに無帽子の半身像と同じように頭上空間を10%に縮小補正してみると、いくらか窮屈でもある(図15右)。そこで、帽子のない半身像の頭上空間も13%に拡大してみると、さらに落ち着いた上品さを感じられた。このことから、帽子を被っていないときの半身像や、低い帽子を被ったときの半身像においては13%程度の頭上空間があると、窮屈さがなく、画品のある構図になると期待できる。

また、高い帽子を被った半身像には、当初設定通りに13%の頭上空間が与えられている(図16左)。この状態でも目立った不自然さはないが、空間がやや広いようにも感じられる。そこで、両目の位置(高さ)で画面を上から、黄金比に近い5:8に内分するようにトリミング補正してみたのが図16右側である。このときの頭上空間は画面縦寸の5%程度になったが、モデルの顔に視線が自然に行きやすくなり、補正する前よりも主題が明確になっている。他の高い帽子の場合でも、13%の頭上空間を設けたときより、目の高さで画面を5:8に内分するように補正したときの方がより自然美を感じることができる。よって、半身像においては、無帽時や、低い帽子を被った場合には13%の頭上空間を設け、一方、高い帽子の場合には、目の高さを、画面縦寸を5:8に内分する位置に置く方法が有効であり、そのときに、頭上に5%前後の空間があれば良いと考えられる。

### 3.4 七分身像の頭上空間に与える帽子の影響

帽子のない七分身像に設けた12%の頭上空間には、特にこれと言った魅力を感じるができない(次頁図17)。低い帽子を被った七分身像に15%の頭上空間を設けたのが図18左で、無帽子のときと同様に12%にトリミング補正したものが図18右である。左右の両図を比較すると、15%のときの方がゆったりとして自然な印象を受ける。このことから低い帽子を被ったときや無帽子の七分身像では、15%の頭上空間を設定するのが良いと考えられる。

高い帽子を被った七分身像には当初の設定通り、李氏朝鮮肖像画の七分身像における標準的な15%の頭上空間を設けた(図19と図20左)。このとき頭上が幾分広過ぎて、不自然なようにも感じられる。そこで、試みとして12%に縮小補正してみたのが図20右である。このときには広過ぎ感が全くなく、すっきりして見える。

ところで、七分身像ほどの大きさになってくると、全身立像からトリミングするのと、全身座像からトリミングするのでは、頭上空間の大きさに違いが出てくるのではないかという疑問が湧いてくる。そこで試しに、無帽時の全身椅子座像と低い帽子の全身椅子座像について、上述の〈低い帽子を被ったときや無帽子の七分身像では、15%の頭上空間を設定するのが良い〉に従い、15%の頭上空間を持つ七分身像としてトリミングしてみた(図21)。また、高い帽子を被った椅子座像には、立像時の補正に倣って12%の空間を持たせた(図22)。図21と22のどちらにも不自然さは感じられないことから、立像であっても座像であっても、七分身像では、無帽や低い帽子の場合には15%の頭上空間が良く、高い帽子の場合には12%の頭上空間が望ましいと考えられる。



図14 無帽の半身像 (左:5%, 右:10%)



図15 低い帽子の半身像  
(左:13%, 右:10%)



図16 高い帽子の半身像  
(左:13%, 右:5%程)



図17 無帽子 12%



図18 低い帽子 (左:15%, 右:12%)



図19 高い帽子  
(15%)



図20 高い帽子 (左:15%, 右:12%)

(※ 図17～22の見方:( )内は画面縦寸に占める頭上空間)



図21 無帽子 (15%)



図22 高さのある帽子  
(12%)

### 3.5 全身立像の頭上空間に与える帽子の影響

帽子のない全身立像に20%の頭上空間、及び10%の足下空間があるとき(次頁図23左)には、「意図が不在である」(注6参照)ようには見ることができない。この場合、大きく空いた頭上空間を始め、背景全体に意味のある具体物が描かれなくてはならず、肖像画というより寧ろ、寓意や物語性のある人物画の構図として有用だろうと考えられる。図23中央は頭上空間を10%に縮小したものである。このときの方が肖像画としての収まりは良いだろう。図23右のように、頭上空間を10%、足下空間を5%にした場合は、下側がやや窮屈にも感じられる。したがって、無帽子の全身立像に物語性などを持たせて描くのであれば、頭上に20%、足下に10%の空間を設定すれば良く、単身の肖像画として制作するのであれば、頭上と足元にそれ



図23 帽子のない全身立像

(左：20-10, 中央：10-10, 右：10-5)

(※ 図23～28の見方:( )内の数値は頭上空間-足下空間の順:%)

どれ10%の空間を設けるのが「自然」であると考えられる。

また、低い帽子を被った場合に、当初設定通り2%ずつの頭上空間と足下空間があるとき、かなり窮屈さを感じられる(図24左)。そこで、先に無帽子の全身立像で「自然」な見せ方と考えられた上下10%ずつの大きさにトリミング補正を試みたのが図23右である。こちらの方が自然で、「意図が不在である」ように感じられることから、低い帽子を被った全身立像を描く際にも、無帽子の全身立像と同様に、上下に10%の空間を設けるのが望ましいと考えられる。

高さのある帽子を被った全身立像に、当初設定通り、上下2%ずつの空間を設けたのが図25右である。写実的な単身人物肖像画としては、きわめて窮屈で不自然な構図と言える。試しに頭上空間を5%、足下空間を10%に補正してみたのが図25左で、こちらの方がより自然に見ることができる。

### 3.6 全身椅子座像の頭上空間に与える帽子の影響

帽子のない全身椅子座像に、西洋流の全身肖像画における標準的な20%の頭上空間と10%の足下空間を設けると、ゆったりとして見えるが、何らかの「意図」があるようにも見受けられる(次頁図26左)。そこで上下の空間を10%ずつに補正してみると、より自然な見え方になった(図26中央)。さらに、足元の空間のみ5%に減らしてみた(図26右)が、このときも不自然には見えないことから、帽子のない全身椅子座像においては、頭上に10%、足下には5～10%程の空間を設けると良いと考えられる。



図24 低い帽子を被った全身立像(左：2-2, 右10-10)



図25 高い帽子を被った全身立像(左：2-2, 右5-10)

低い帽子を被った全身椅子座像の場合、当初の設定通りに3%の頭上空間と、足下に8%の空間があるときには窮屈感が強く感じられる(図27左)。そこで試しに、頭上空間を12%、足下空間を10%にしてみたところ、きわめて「自然」で、且つ「意図」を感じさせない構図となった(図27右)。このことから、低い帽子を被った全身椅子座像では頭上に12%程の空間と、足下に10%程度の空間があると良いと言えるだろう。振り返って、帽子のない全身椅子座像についても、頭上に12%、足下に10%の空間を設けてみると、上下の空間が10%ずつであったときよりも、さらに自然でゆったりした構図になり、画品さえも感じられるようになった。このことから、帽子がない、または低い帽子を被った全身椅子座像では、12%程の頭上空



図26 帽子のない全身椅子座像  
(左：20-10, 中央：10-10, 右：10-5)



図28 高い帽子のある全身椅子座像 (左：3-8, 右：5-5)



図27 低い帽子のある全身椅子座像 (左：3-8, 右：12-10)

間と5～10%の足下空間を設ける構図が良いと考えられる。

また、高い帽子を被った全身椅子座像に、当初の設定通り、頭上空間を3%、足下空間を8%設けてみたのが図28左である。決して不自然ではないが、頭上空間を5%に拡大し、足下空間を5%に縮小補正してみたところ(図28右)、こちらにも不自然さは感じられなかった。したがって、高い帽子を被った全身椅子座像では、3～5%の頭上空間と、5～8%程の足下空間があると良いと考えられる。

#### 4. ま と め

単身の頭像、胸像、半身像、七分身像、全身立像、全身椅子座像を制作する際に、帽子の有無や、帽子の高さの違いが構図にどのような影響を及ぼすかについて考察を試みたところ、帽子本体の高さではなく、被ったときや載せたときに、帽子の頂が実際の頭頂部からどれだけ高くなったかによって、設けるべき頭上空間の大きさに違いがあることが分かった。帽子によって、頭頂部からの高さが増すほど、頭上空間は狭くなると言える。李氏朝鮮時代の肖像画では、高い官帽が描かれることが多いため、西洋流の肖像画に比べて、頭上の空間が狭いことが証明できた。

研究の結果、帽子がない場合や、低い帽子を被った場合には、頭像で10%強、胸像で10～15%、半身像で13%前後、七分身像で15%、全身立像で10%、全身椅子座像で12%の頭上空間があると、自然な見え方になると言える。一方、高い帽子を被った場合になると、頭像で3～6%、胸像で7%、半身像で5%前後、七分身像で12%、全身立像で5%、全身椅子座像で3～5%の頭上空間が標準であると言えるだろう。また、全身像では、足下の空間の大きさも構図に関わってくるので配慮を要する。標準的な足下空間の大きさは、無帽または低い帽子の場合、立像で10%、椅子座像なら5～10%、高い帽子の場合には、立像で10%、椅子座像なら5～8%が適当だと考えられる(下表2参照)。

大雑把な数値で頭上空間の大きさを表すなら、無帽または低い帽子を被っている場合には、画面縦寸の10%(頭上空間：人物=1:9)か、それ以上、高い帽子を被っているときには半分の5%(1:19)程度の頭上空間を設けるのが標準だと言えるだろう。但し、七分身像だけは例外で、広めにする必要がある。わが国を代表する現代美術作家の奈良美智の胸像画『Miss Moonlight』(森美術館所蔵)は、写実的な絵ではないものの、11%の頭上空間が設けられているのは興味深いことである。誰もが、人物画の構図に対する潜在的共通感覚として「自然美」を求めているのかもしれない

表2 標準的な頭上空間

	無帽または低い帽子のとき	高い帽子のとき
頭像	10%強、または目の高さで画面を1:1に内分	3～6%
胸像	10～15%	7%
半身像	13%前後	目の位置で画面を5:8に内分、5%前後
七分身像	15%	12%
全身立像	10%(足下:10%)	5%(足下:10%)
全身椅子座像	12%(足下:5～10%)	3～5%(足下:5～8%)



ない。

人物肖像画の構図では、人物の配置のみならず、他に描き入れる物の形や大きさ、明度差による画面の構成なども考慮されなくてはならない。構図について、画家の佐々木豊は「明度対比によって人物を浮かびあがらせるようにするのが基本」<sup>7)</sup> だとし、渡邊・小澤は「従来の計算された構図法を踏まえつつ、あくまで自分の研ぎ澄まされた本能を尺度とする構図のとらえ方が、今日の絵画制作には求められる」<sup>8)</sup> と言う。筆者が本稿で示した頭上空間はあくまで標準的な数値であり、そこからどのように離れていくかというところにも、創作の可能性があると考えている。

## 5. おわりに

本研究で得られた知見が、肖像画に興味を持たれている方々、人物画を指導されている方々、人物肖像画を描かれている方々の一助になれば幸いである。

## 謝 辞

本研究はJSPS科研費 JP19K02838の助成を受けたものです。

## 注

- 1) 松本昭彦, 2010, 「肖像画の構図に関する研究 - 単身肖像画における頭部と胴体の標準的配置について -」, 『愛知教育大学研究報告』, 59, 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, pp.11-18

- 2) 松本昭彦・横山鉄郎, 2022, 「朝鮮肖像画の構図に関する研究」, 『美術教育学研究』, 54, 大学美術教育学会, pp.329-336
- 3) 前掲1) 全身像における「頭上高:人物高:足元高」について「概数比で2:8:1である」(p.17) としているため、本研究においても足下空間は頭上空間の半分である10%を設けることとした。
- 4) 前掲2) 李氏朝鮮時代の全身立像では「標準的には2~3%の足下空間が設けられている」(p.334) としているため、本研究においては頭上空間に合わせて2%の足下空間を設けることにした。
- 5) 同上 朝鮮肖像画の全身椅子座像では「標準的には8%程の足下空間が設けられている」(p.333)と記した。本研究でもそれを踏まえて足下空間を8%とした。
- 6) 谷川渥, 2001, 「美学と芸術学」, 『絵画の教科書』, 日本文教出版, p.19に「彼(カント)の言う〈美〉とは、〈芸術美〉というよりはまずもって〈自然美〉のことでした」とある。また、小田部胤久, 2020, 『美学』, 東京大学出版会, p.301では「カントが〈自然〉という語によって意味しているのは、〈意図〉の不在にはかならない。ここで問われているのは、芸術制作において意図が実際に不在であるか否かではなく、意図が不在であるかのように見えるか否かである」と書かれている。本研究では、このような考え方にに基づき、トリミングされた構図に対し、意図や不自然さを感じさせず、自然に見えるか否かを判定の基準としている。
- 7) 佐々木豊, 1976, 『構図と色彩』, 591, アトリエ出版社, p.44
- 8) 渡邊晃一・小澤基弘, 2001, 「構図について」, 『絵画の教科書』, 日本文教出版, p.57

(2022年9月16日受理)